

【鵜捕り】

長良川の鵜飼は、野生で捕獲された鵜の安定的な供給に対する需要を生み出す。長良川の鵜匠が使う鳥はすべて、鵜の岬として知られる茨城県の一地点（日立市北部の伊師浜海岸に位置する）から送られて来る。実のところ、この一箇所から、今日の日本（長良川だけでなく、鵜飼が行われる全国の10拠点すべて）で使われるすべての鵜が供給される。罨による鵜の捕獲は鵜飼の実践に不可欠であると考えられ、1992年、無形民俗文化財にも指定されている。

伊師浜海岸は、移住性の水鳥にとって魅力的な中継地点である。白い砂の広いビーチはごつごつした岩棚と崖で囲まれており、疲れた鵜にとって魅力的な休憩場所となっている。4月から6月にかけて、鵜が南からやって来る。千島列島や北海道の繁殖地に向かう途中のことである。10月から12月にかけて、冬を過ごす暖かい場所へ向かう途中の鵜が茨城に訪れる。毎年、上記の2つの期間には、一般の人の岬への立ち入りは制限され、鵜を捕獲する罨師が仕事に取り掛かる。

崖の1つには、海上およそ15メートルの高さに、大きな隠れ場所（鳥屋）がある。これは罨師により設けられた建物で、織った藁と竹で作られている。この鳥屋は、長さ12メートル、幅3メートルであり、野生の鵜が休憩のために着地するごつごつした岩棚の全長にわたっている。隠れ場所の外、崖の端に、罨師が生きたおとりの鵜（片方の足首に紐を巻かれ、岩棚に繋がれている）を置く。おとりの鳥が居ることで、飛んできた野生の鵜はこの崖が安全だと認識し、安心してしまう。この間、罨師は隠れ場所の中で待機しつつ、壁の小さい穴から様子を窺っている。

野生の鵜が舞い降りたときには、罨師は素早くその年齢を見積もらなくてはならない。罨師は、茶色の翼と白いまだら模様の胸に特徴がある、2歳前後の若鳥を探す。3歳までに、この種の鵜はほぼ完全に黒色に変化する。十分若く見える鳥を見つけたら、罨師はとても用心深く、先端にフックが付いた棒（かぎ棒と呼ばれる）を延ばす。鵜を上手く引っ掛けるには、タイミングが重要だ。罨師は鳥の足首にフックを引っ掛けて、壁の下、そして鳥屋の中に引っ張り込まなければならない。そして、鵜はとても鋭いくちばしを持つので、仕返しをしてくる前に、首をしっかり押さえる必要がある。罨師は昔、先端に粘着物質が塗ってある竹竿を使っていた。鳥もちと呼ばれるこの物質は、鳥の羽と体にくっつき、その鳥が飛んで逃げるのを阻止するものだった。20世紀後半以降、鳥もちの使用は厳しく規制されるようになり、罨師は鵜に不慮の傷害が加わりにくいかぎ棒を使うようになった。

鵜飼漁師が必要とするのは、大きく健康な適齢の鳥である。そのため、捕獲された鵜のうち鵜飼用となるのは、10～15羽ごとにおよそ1羽のみである。鵜は、捕獲後10日間は茨城に留まり、2度にわたり、鳥インフルエンザの試験を受ける。鵜を新たな生活の地へ送る時間になると、罨師は噛みつきを防止するための小さい木の板（ハシガケ）を鵜のくちばしに結び、手織りの藁籠に入れる。岐阜のような比較的近隣の地域に送られる鳥は、トラックに乗せられ、鵜匠の住宅まで運ばれる。遠方の場合、鳥は空輸によって配送される。

江戸時代（1603～1867年）の記録によれば、日立では何世紀もの間、罨による鵜の捕獲が行われていた。大正時代（1912～1926年）には、日立は鵜飼漁師の鳥の供給元となった。しかし、この捕獲技術の伝統を受け継いでいるのは、2018年の時点で3人の

男性のみである。鵜飼の継続におけるその重要性を考えると、鵜を罟で捕獲する技能は必須のものであると言える。漁師は毎年、飼育する群れに新しい鳥を追加する。その際には専ら、日本で1400年以上にわたり用いられている、野生で捕獲された鵜が好まれる。鵜は夏場は漁に忙しく繁殖にあてる暇が無いので、飼育下繁殖は実現困難であろう。さらに、鵜匠の中には、野鳥は生まれつき才能に優れ活力も豊富なことから、魚を捕る能力が高いと考える者もいる。